

なぜうなだれるのか、わたしの魂よ

なぜ呻くのか

神を待ち望め。

わたしはなお、告白しよう

「御顔こそ、わたしの救い」と。

わたしの神よ

（詩 42 篇 6 節・12 節・42 篇 5 節）

1. 「なぜうなだれるのか、わたしの魂よ」のリフレイン —絶望に抗い続ける詩人—

この詩の通奏低音は、神を待ち望むことによって、絶望に立ち向かう信仰者の葛藤です。過去の神殿礼拝の記憶は詩人の現況を照射して苦しみ、現在も不遇は改善されず、将来は神の御手の中にあることを知っていますが、自分の訴えを聞き届けて下さるかは不明です。御顔を向けて欲しい！そういう状況のなかで詩人は「なぜうなだれるのか、わたしの魂よ」とみずからを叱咤するのです。「お前の神はどこにいる」（4・11 節）と嘲る者たちのなかであって、四面楚歌ともいうべき状況の中であって、神を待ち望むことにすがって、なお「御顔こそ、わたしの救い」と告白するのです。

2. 黙想（3）－「神を待ち望む」－

「望」という漢字は山の端に「月」が隠れて「亡い」状態を人が伸び上がって見ようとする姿といます。まだか、まだかと背伸びして遠くをみようとする解字です。「待望」はこれに通じます。この詩人は御顔を仰ごうとし、うつむくこと、うなだれることを拒絶します。みずからのうちを覗き込んでも救いはありません。あるのは絶望だけです。水平の次元も敵に囲まれ、人間の世界に意味ある言葉も、救いも見い出せない状態です。だから頭上を仰ぐのです。また「待ち望む」というヘブライ語は、もともと綱や、縄を意味する言葉で、相手に縛り付ける、結びつける、巻きつく意味があるそうです。詩人は、神に、自身を結びつけ、御顔を仰いで嘆願することで、絶望から待望へと生き方の向きを変えています。救いはわたしの外に、神の恵みと慈しみの中にあります。「わたしたちの助けは、天地を創られた主の御名にあるからです」（詩 124 篇 8 節）。

昼、主は命じて慈しみをわたしに送り

夜、主の歌がわたしと共にある

わたしの命の神への祈りが。

（詩 42 篇 9 節）

この詩には、9 節に浮き島のように、詩人が神の臨在を感じ取った瞬間が記されています。逆境のなかであって、なお「昼も、夜も」守られている、いまわたしがこうして神を仰いでいる祈りそのものが、主の恵みの賜物であると、そっと呟いています。このようにわたしたちは、神から信仰を与えられて、「待ち望む」生き方によって守られるのです。